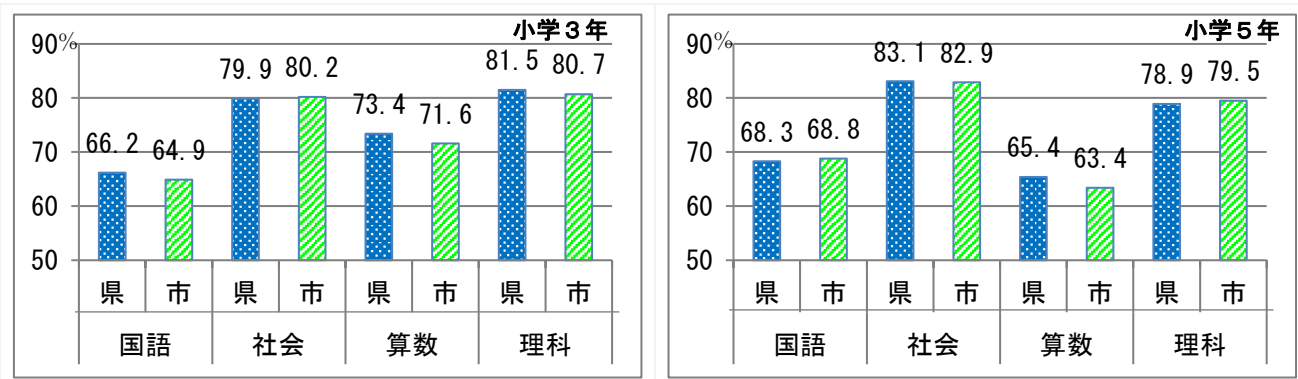


令和元年度千葉市学力状況調査結果概要（小学校版）

※令和元年度の中学2年生における調査は、休校措置のため実施していません。

1 県と本市の平均正答率との比較



○小学3年の国語・算数・理科、小学5年の社会・算数で県平均を下回り、それ以外の小学3年・5年の教科については、県平均を上回っている。

2 各教科の改善策

【国語】 伝える相手や目的を明確にした言語活動のより一層の充実

小学3年

- 伝える相手や目的を明確にし、伝えたいことの中心が聞き手に分かりやすくなるよう、話の構成を考える学習を展開する。
- 段落相互の関係に着目しながら、考えとそれを支える理由や事例との関係などについて、叙述を基に捉えられるような言語活動を工夫する。

小学5年

- 日常生活の中で相手や場面に応じて適切に敬語が使えるよう、敬語の役割や必要性を自覚させながら活用する機会を増やす。
- 書く目的や意図を明確にし、表現の効果を確かめたり工夫したりするような、必要感がある言語活動を設定する。

【社会】 体験的な活動や具体的な資料の活用を基にした、思考力・判断力・表現力の育成

小学3年

- 見学や観察、聞き取りなどの体験的な活動や、地図・資料による情報の収集活動、情報を白地図などにまとめる活動を通して、学習問題の追究・解決に必要な情報を、読み取れるようにする。
- 学習問題の解決に向けて、調べたことや考えたことを文章で記述したり、資料などを用いて説明したりする学習を取り入れる。

小学5年

- 学習問題について追究したことを整理し、まとめたり発表したりする活動を繰り返し行い、知識の再構築を図ることで、社会事象に関する知識の確実な定着を図るようにする。
- 社会の課題や社会への関わり方について思考したり判断したりする活動やそれを表現する活動を各単元の終末に位置付けることによって、思考し表現する力を育成する。

【算数】 数学的に表現し伝え合う数学的活動のより一層の充実

小学3年

- 解決の過程や事象の根拠を、具体物、図、数、式などを用いて表現する数学的活動を重視する。
- 文章題の場面を把握し、筋道を立てて順序よく問題を解決できるように、場面ごとに区切ったり、状況を数で表したり立式したりして、思考力・判断力・表現力を育む。

小学5年

- 文脈を理解するために、問題場面を図と関連させながら説明する活動を重視する。
- 切る・折る・移動する・裏返すなどの操作的活動を通して、一つの図形を多様な見方で捉えられるようにし、豊かな発想で問題解決できるようにする。

【理科】 目的意識を持った観察・実験、根拠を基にした思考力・判断力・表現力等の育成

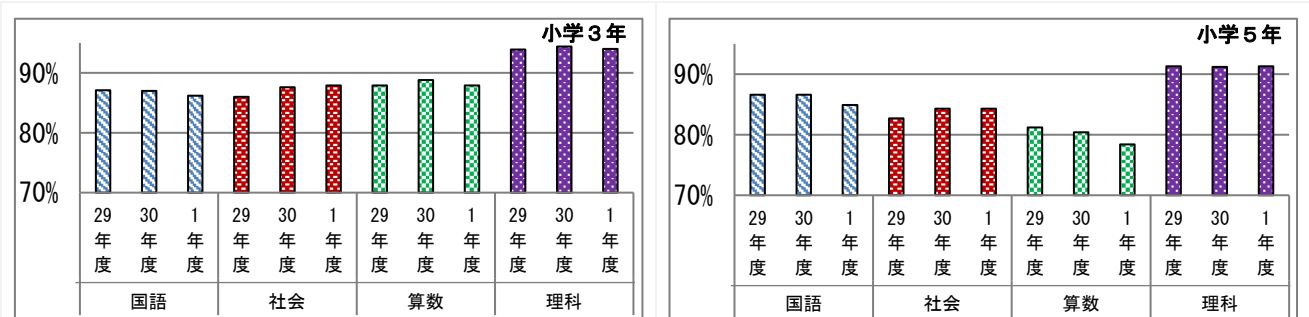
小学3年

- 獲得した知識を適用し、「理科の見方・考え方」を働かせながら問題解決を行うことで、科学的な思考や表現ができるように調べ活動や発表などを取り入れる。
- ものの体積と重さの関係について、重さを比較しながら調べる活動を通して、形や体積に着目し、差異や共通点に気付きながら理解できるよう指導を工夫する。

小学5年

- 器具の正しい操作方法やそれぞれの手順における留意点を確認し、目的意識を持ち、繰り返し観察、実験を行うようにする。
- 実験、観察から得られた結果を整理し、それを根拠として自分の考えを表現したり、他者に説明したりする活動の充実を図る。

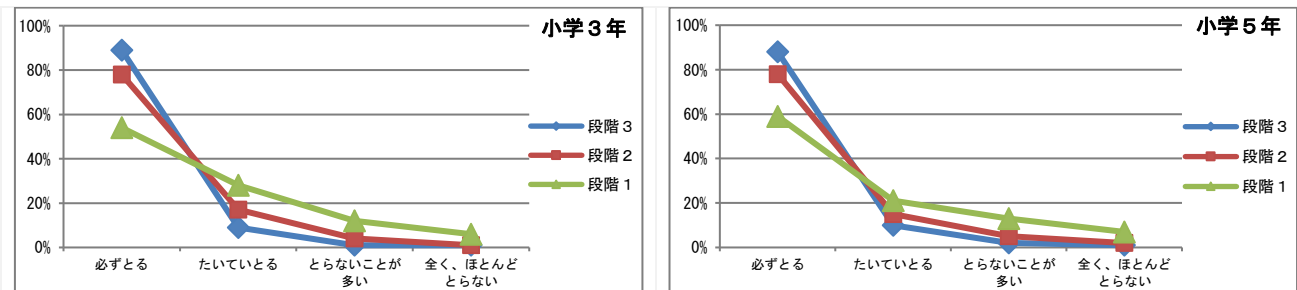
3 学習に対する意識（学校の勉強がわかる）



「理科がわかる」割合は91%以上

3・5年ではともに理科の学習がわかるという回答の割合がそれぞれ94%、91%と高い。前年度と比較して肯定的回答率が向上しているのは3年の社会と5年の理科で、5年の社会は前年度と同程度である。3年の国語、算数、理科と5年の国語、算数は、前年度と比べてわずかに低下している。

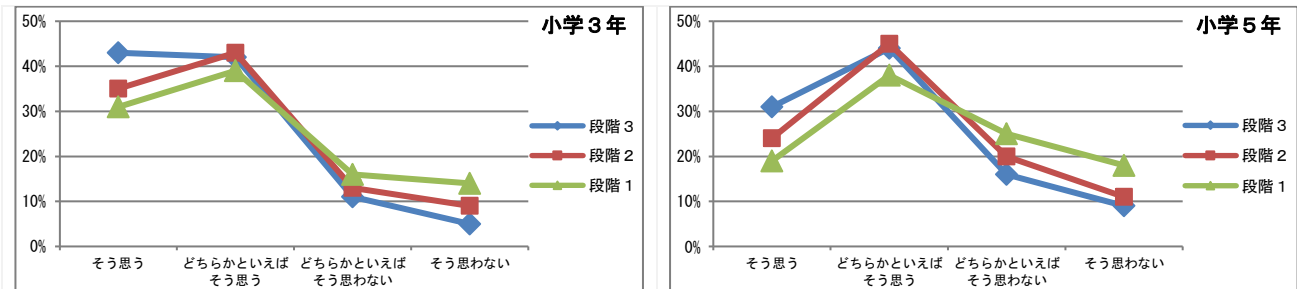
4 朝食の喫食率と学力との関連を示唆 ※標準偏差により、成績上位群を段階3、成績中位群を段階2、成績下位群を段階1としている。



「成績上位群・中位群」と「成績下位群」とで、やや差が見られる

「朝食を必ずとる」と「たいていとる」を合わせると「成績上位群・中位群」ともに90%を越える数値を示しているが、「成績下位群」ではおよそ80%の数値を示しており、やや差が見られる。朝食の喫食率と学力には関連がある。

5 自己肯定感と学力の関連を示唆 ※標準偏差により、成績上位群を段階3、成績中位群を段階2、成績下位群を段階1としている。



「成績上位群」は自分のことを肯定的に捉える傾向がある

「自分によいところがあると思いますか」の問いに対し、「成績上位群」は自分のことを肯定的に捉えている傾向があり、「成績下位群」は自分のことを否定的に捉えている傾向がある。また、学年が上がるにつれて、自分を肯定的に捉える児童が減少し、自分を否定的に捉える児童が増加する傾向が伺える。